

---

# Sword Queen

sunnysing

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Sword Queen

### 【Nコード】

N6500J

### 【作者名】

sunnysing

### 【あらすじ】

なぜか男として育てられ、戦場では誰よりも華麗に舞い、死の女神と怖れられる宰相の娘、シーナ。賢君と謳われた現王、フィリッブが産んだたった一人の息子であり、父に似ずヘタレで病弱で根性も腕っ節も男気もない王子、ネロ。ネロの治世に国が滅びぬよう、現王は最期の一手を打つ。それは、シーナをネロに嫁がせ、彼女の男らしさをネロに学ばせるというものだった。

## 王と宰相の密談

北大陸、セイレーンで最も強大と謳われる国、エリアルルの王宮の一室で、男二人が密やかに、テーブルを挟んで談義を交わしていた。一方は綺羅綺羅しい冠を戴き、豊かな口ひげが顔の半分を覆った男。残る半分の肌は土気色で、傍目からみても健康とは言えない。

もう一方の男は、冠こそ被ってはいなかったが、それでも身につけているものを見れば、それなりの身分であることは手に取るように分かる。最近になって皺が段々と出てきたようだが、それでも元々彫りの深い顔立ちである彼は、若かりし頃は相当の美男だったろうと思われる。

彼は眉を寄せ、どこか懸念のありそうな表情で、声を低くさせながら言った。

「王。起き上がったては身体に障ります。どうか部屋にお戻り下さい。政務の方は、私共々、臣下が粗相の無いよう努めます故、どうか」

「ロナルド」

王は顔も厳しく、老木のように動じる事無く宰相の名を呼んだ。それだけで宰相は、背筋をぴんと伸ばし、面立ちを緊張させた。

「今日、わしがお前だけをここへ呼んだのは、折り入った話があったからじゃ」

王から直々の相談。それだけで、ロナルドは身の竦むような思いがした。王と共に政務を携えるようになって早10年。様々なことを語らい、個人的な悩みを聞き入れ、その都度頭を絞って解決策を捻り出してきた。だが、ここまで個人的かつ深刻そうな王の顔を、

ロナルドは未だかつて見たことが無い。

王がここまで真剣になる話とは、何のことだろう。現在、南大陸の最大の国家と行っている戦争についてだろうか。ロナルドは内心頭を振った。長年の勘だが、政務的なことではないような気がした。

(まさか・・・)

ある可能性に行き着き、ロナルドはハツと息を呑んだ。

王は、自分の思惑を察し、蒼白になった宰相を横目で眺めながら、萎びた手をカップに伸ばした。

「そうじゃ。わしの息子、ネロのことなのだがな」

紅茶を引つ掛け、ほうつと深く息をつく。その仕草一つだけでも非常に重々しく、体力を用いそうな様子に、宰相は二重にハラハラさせられた。

王はカップを痙攣する手で受け皿に置くと、当代一の芸術家が作成した最高級の窓から空を遠い目で見やった。

「わしはの、ロナルド。あれほど根性も度胸も持たぬ、男気の欠片もない奴を見たことが無い」

宰相は、是とも否とも答えなかった。是と言えば王に、どこがどう男らしいのかと問いたただかれるだろうし、否といえれば反逆人とみなされ、直ちに国を追い出だろうからだ。ロナルドは賢明だった。

「他の息子を育てれば良い話じゃった。だが子宝に恵まれぬまま月日は経ち、あやつだけがのうのと育ちおった。こうなってしまうてはもう避けられぬ。わしの死後、ネロが次代の王となるう。だが果たして、このまま息子が玉座に上がって、国は大丈夫だろうか？」

大丈夫なはずが無い。おそらく、現王が生きている間に戦争が終結することはないだろう。ネロ王子の御世まで火花は飛び移る。そして、あのネロが指揮をとればまず間違いなく……

「エリアルが減びる、危機かもしれぬ」

しれない、などという生ぬるい表現では足りない。間違いなく敗戦し、主権は敵国の手に渡るだろう。このままでは駄目だ。

「そこでだ。わしは最善の一手を考えた。あの息子を変えることが出来るやもしれぬ一手をな」

王の厳しい目が、ロナルドを捉える。ロナルドは息をするのも忘れて、王の次の言葉を待った。

王は一つ、深く息を吸って吐いた後、堂々と突拍子もない一言を放った。

「ロナルド。お前の娘を、ネロの嫁にしろ」

## 戦場を舞う乙女

「進撃ーっ！」

「怯むな、進めーっ！」

血と、銃弾と、魔法の残臭。鎧に身を包んだ兵士達が行き交い、敵味方の区別などとうにつかなくなっている。剣を振りかざし、召喚獣が猛威を振るう。

「あー、ちよつとピンチかも？」

三人の男に囲まれ、一人の兵士はいかにも気楽そうに言った。兜の下から覗くのは、どこか赤みがかった金髪。肩には彼の家の紋章、片手に剣、もう片方の手に豎琴を持った女神の姿が刻まれている。彼に戦意が無いのを良いことに、三人の敵兵はいきり立った。

「逃がすなよ。あの紋章、カールトン家の者だ」

「殺したら偉い手柄になるぞ」

「なんせ敵王の宰相の息子だからな！」

はあ、と彼は溜息をついた。

「親の七光なんて、持つもんじゃないねえ・・・」

彼の言葉など耳にも入れず、三人の男たちは一斉に三方向から彼に襲い掛かる。脳裏に浮かぶのは、将来の美人な妻。あなたの勇敢さに惚れましたわ。そう言って彼女は自分の肩に寄り添うのだ

「ぐはっ！」

ターゲットの左右から飛び出した二人は、それぞれの視界の端で、正面から飛び掛ろうとしていた男の身体が傾くのを見た。苦しうに顔を歪め、あっけなく視界から脱落してゆく。一瞬、何が起こったのか分からなかった。

状況は分からない。ただ、今自分がすべきことは、目の前の男を刺し殺すことだけ

「うっ！」

右側から剣を振り上げた男は、思わず息を呑んだ。キーン、と刃が交わる音がする。腕に力を込め、男は相手の剣を振り払おうと踏みとどまり、そして 彼女を見た。

「お前は・・・！」

彼女は無言のまま目を細める。剣に込められた力が増していく。男は狼狽した。この女、強い。強すぎる。このままでは・・・

「兄様を傷つける奴は、許さない」

冷やかに、乙女は言葉を放つ。一拍の後、男の腕が急に軽くなった。と思うと次の瞬間、胸に鈍い衝撃が走った。

「く、そ・・・女、ごときに・・・！」

胸を貫いた彼女の剣が、刺した時と同じように勢いよく引き抜かれる。膝の力が抜けて、身体が傾く。最後の力を振り絞り、見上げた死の乙女の顔は、息を呑むくらい美しかった。

大地に力なく横たわる。霞み行く視界の隅に、味方の倒れ伏す姿

が見えた。

(そうか・・・)

俺は、殺されたのか。

\*

\*

\*

「助かったよ、シーナ」

彼女が始末し損ねた最後の一人、左から向かってきた敵兵の息の根を難なく止めると、彼は兜を取って振り返った。彼女は彼に背を向け、剣を懐に収めているところだった。

「レオ兄様、お怪我は？」

「ほとんど無いよ。シーナこそ、血だらけだけど大丈夫？」

「全部、私の血ではありませんから」

シーナは振り返った。その白い頬にすら返り血がついているのを、兄であるレオは勿体無く思う。とても綺麗なのに、血などで汚してはならない、と。

「・・・兄様？」

シーナは思わず目を丸くした。戦闘の真っ只中で、兄がいきなり自分のマントで妹の血塗れた頬を拭い始めたら、誰でも驚くものだろう。

「汚してはいけないよ、シーナ」

優しく微笑み、ついではかりにレオは、彼女の肩に当てられた鎧もすっかりとこする。赤く濁ってはいるが、白い、両手に剣と豎琴を持った女神の姿が現れると、レオは息をついた。

遠くで停戦のラッパが聞こえる。今日のところはもう終わりなのだろう。陽も傾き、空はオレンジ色に染まっている。

二人の強すぎる兄弟は、揃って簡易テントへと歩みを進めた。

## 緊急要請

エリアル軍事基地、“移動の間”。ここは、移動術テレポルトに優れた使者専用のスペースである。本来、漠然と行きたい場所に行き着くことは出来ても、細かく設定されたポイントに移動することは難しい。よって使者としての移動術師テレポーターは皆、かなり高度な技術を要される。

本日新たな移動術師テレポーターが“移動の間”に現れたのは、まもなく日付が次の日に移行しようかという時。平たくいえば深夜だった。本来なら、集団行動というやりにくい状況の中で食事も入浴もやっと済ませた戦士達が、続々と睡眠を取りに入る時間帯である。少しでも気を抜けば敵にやられる、という張り詰めた緊張感の中、少しでも休もうとする兵士達が、真夜中に突如現れた使者を無下にしなかったのは、一重に使者が緊急要請のために来たと分かったからだ。

使者は非常に疲れていた。国内とはいえ、国都から基地までは約三度の移動テレポルトが必要になる。大抵の者なら一度だけでも体力の半分を行使するその魔術を、連続的に、それもほとんど休息を取らずに身体を酷使させたため、やっと目的地にたどり着いた時には、使者は一人で立つことすら出来なかった。気遣わしげに身体を支えてくれる兵士の耳元に、自分の身体よりも、と使命を優先し、要請担当者の名を口にした。

戦士達はおののいた。体裁を繕って“使者の間”に向かおうとする使者を留め、無理やり“癒しの間”に連行しつつ、手の空いている戦士達は残らずかの兵士の搜索を開始し、声を張り上げて名を呼んだ。自室にいたとは限らない。あの兵は実に自由に動くので、少し目を離している隙にどこか遠くへ行ってしまう。それを咎められるような関係ではなかったし、第一気づけば何事も無かったように

隊にいるので誰も口には出さなかったが、かの兵士は、いつか、誰の手に届かない遠くへ消えてしまいそうだと誰もが思っていた。

だが今日は、どうやら兄の自室にいたらしい。“レオ・カールトン”と書かれた札付きのドアを音も無く開け、その兵は現れた。

「なんだ？騒々しい」

どこか不機嫌そうだった。

「父上が？」

「はい。戦闘から離れ、急遽国都へ戻るようにとのお達しです」

「今は戦時だ。とりわけ今回は力量も五分だから、一人でも欠けては相手に押されかねない。お前、話の内容は聞いていないのか」

「はい。一応伺ったのですが、直接話されたいそうで・・・」

額を押さえ、眉を寄せ、戦場の女神ことシーナ・カールトンは息を吐いた。その姿ですら一種の神々しさを感じ、控えていた他の兵士達が溜息をつく。

重い鎧をまとい、女の手には重かるう立派な剣を握り、戦場で誰よりも華麗に人の命を奪うこの女戦士は、その中身がとても淑女からかけ離れているにも関わらず、男女関係無くその心を捉えることで知られていた。男のように短く切り揃えられた金髪でさえ、揺れる金糸のように眩しかったし、鎧を脱ぎ、軽く夜着を羽織っただけの彼女は、いつもは分からない身体の細い線が露わになり、出るべきところが出ていないにも関わらず、文字通り女神のように美しい。本来男なら、このように素晴らしい女性がいたら放っておかないの

だが、彼女の血筋や身分、そして男よりも男らしい性格と並外れた武術を前にしては、誰も口説くことなど出来ないのであった。

「分かった」

一拍考えた後、シーナは躊躇いもなくきっぱりと答えた。使者の顔がにわかにも明るくなる。逆に、周りにいた兵士達の顔は、一挙に暗くなった。

「しかし！シーナ様がおられなければ我らはやられてしまいます！」

「今日も私はシーナ様に助けられたも同然で！」

「シーナ様！あと少しだけここにいらしてください！」

蒼白になつて退き留める兵士達の名を一人一人呼び、シーナは少しだけ口元を緩めた。滅多に表情を変えず、かつ美麗な面相の持ち主であるシーナは、それだけで百の淑女の破顔と同じものを作り出す天才だった。

「ありがとうございます。そなた達の気持ち、しかと受け取った。約束しよう。必ず戻る。兄様によりしく伝えてくれ」

そしてあつという間に、テレポーター移動で消えてしまったのだった。

## 戸惑う死の女神

自国エリアルだけならまだしも、敵国トワパドからも一目置かれて  
いる戦場を舞う乙女ことシーナですら、さすがに三度の移動をテレポート一  
日で終わらせることは出来なかった。ただでさえ戦いで消耗してい  
た体力を搾り出さねばならないシーナは、一日に一つの移動場所へテレポートポイント  
向かうだけで精一杯で、結果、緊急要請が掛かった当日から三度太  
陽が昇り沈んだ後、やっと王都に辿りついた。だが緊急要請を伝え  
た使者同様、王都に着いた直後のシーナは立つことすら出来ず、丸  
一日を回復に宛がったため、本当に要請の内容を知ったのは、当日  
から四日後のことだった。

とはいえ。

「なぜ今日はこのような格好なんだ。いつもは簡単な男装で済ませ  
るといのに」

死の女神は戸惑っていた。今日は、待ちに待った父との久々の対  
面なのだ。いつものように気に入りのブラウスを羽織り、皺一つな  
いズボンを履いて、手早く準備を済ませたらすぐにも会いに行こ  
うと思っていた。男装は女性の身繕いよりずっと簡単なので、侍女  
の手を煩わせることもない。朝も規則正しく起きる。だからシーナ  
にはお付きの侍女というものがなく、常に一人きりで部屋で着替え  
を済ませていた。それが今日は、一体どういう風の吹き回しだろう。  
朝目が覚めたその瞬間から、異変は始まっていた。

「お早うございます、シーナお嬢様」

侍女が覗き込むようにしてニッコリと微笑む。面食らいつつも答

えるシーナを急かし起こすと、顔を洗わせ、化粧台に座らせ、髪を梳きだす。何と反応したものと声を上げかねているシーナに優しく微笑みつつ、侍女はシーナの両のこめかみにそって軽い編みこみを作り、上出来だと一人満足そうに頷く。そうこうしているうちにドアがノックされ、続々と他の侍女たちが手に手に綺麗綺麗な衣装を捧げながら入室し、髪を整えたシーナをモデルに、あつちのドレスが良い、いやこつちだとてんやわんやの大騒ぎ。最終的に多数決で決まったらしく、気づけばシーナは薄水色のドレスに身を包んでいた。

「本日は久々のご対面ということで、淑女らしいお見立てをと、ロナルド様のご所望です」

「なんだそれは。父上は急にどうなさったというんだ」  
「それは・・・」

侍女が淑やかに口に手を当てて首をかしげ、微笑んでみせる。シーナは全く彼女の思惑が読み取れず、少し苛立った。

「ロナルド様ご自身から、お聞きになりませんと。私どものような身分が言えることではございません。ですがこれだけは言えますのは、本日のお話は、きつと悪いものではないということでございます」

「わけが分からない」

シーナは力なく首を振った。彼女は、侍女たちのように淑やかで女々しい女性の対応が苦手だった。微笑みの仮面に本音を隠し、表だけを取り繕って世を渡る歩く貴婦人。生身の自分を曝け出すことの許されない、束縛された身分。シーナが剣を振るい、男装で男らしく振舞うのは、両親に強要されたこともあるが、このような女性への偏見も一理あった。人の命を奪う術を身につけ、ほんの少し、

その横顔に寂しさを宿らせながら。

「すぐにお分かりになりますわ」

侍女は変わらず微笑みながら、やんわりとシーナを再び化粧台へ導く。椅子に座らせ、簡単に化粧を施すと、シーナは自分でも驚くくらいに女らしくなったのを感じた。侍女たちは一斉に溜息をついた。

「まあ、なんてお綺麗なんですよ」

## 拳動不審な少年

一歩歩くごとに、ドレスの裾がつま先にかかる。とはいえ淑女が乱暴な振る舞いをしてはならないので、両手で裾を持ち上げて歩きたいという衝動をなんとか堪え、しずしずと少しずつ進む。こうして歩いていると、男装の時の半分も進めないで、次第に苛立つてくる。だがそこをまた不屈の精神で抑えつけ、表向きは清品な淑女を装ってシーナは歩き続けた。

女装慣れしていないシーナを気遣ってか、侍女たちは比較的シンブルなドレスを選んだようだった。フリルも宝石もリボンも付いていない、だがどこか洗練された風を感じる薄水色のドレスは、おそらく一般の貴婦人が着る綺羅綺羅しい、服飾という目的を通り越したドレスよりはずっと軽やかさばらない。とはいえ、通りすがりの人々に礼をする時は、片腕を軽く折る紳士的なものではなく、いちいち裾を持ち上げなければならなかったし、前述の通り歩きにくいのも加えて、シーナの機嫌はどんどん底へ落ちていった。

やっと一階分階段を上がりきる。ドレスを着ていると、たった一段上るのですら気苦労を要し、ちっとも楽ではない。せつかく回復した体力がどんどん減少していくのをシーナは感じつつ、氣力を振り絞って再び階段に向かおうとした時、人影が目に映った。

目をやると、見慣れない少年だった。スーツでもなく、使用人服でもなく、ましてやたまに見かける隷属階級のものでもない。身体の線は細く、深緑色のハイソックスにチェックの半ズボンを履いているので膝が覗き、上はストライプのシャツにベストを羽織っている。なんと簡装だ。年の頃は10代の半ばといったところか。亜麻色の細い髪には癖が無く、さらさらとした手触りが想像できる。

まあまあ整った、だが幼さが残る顔だ。シーナは少年が、カールトン家に関係する者ではないと一目で分かった。

シーナは切れ長の目を細め、逡巡した拳句自分から声をかけた。

「誰だ？見かけない顔だが」

少年は瞬間、息が詰まるような顔をした。次いでその目が、驚きにか見る間に開かれる。なんと分かりやすい、とシーナは内心嘆息した。不法侵入か。

「あの・・・えつと・・・」

蚊の鳴くような小さな声を喉から搾り出そうとしている。シーナは見限った。シーナに話しかけられても、構えもしない。たとえシーナより弱くても、姿を見た途端ある程度の構えを取るのが、相応に腕のある剣士である。こんな少年一人潰すのは、赤子の手を捻るようなものだ。所詮敵ではない。シーナは侍女のほうを一瞥すると言った。

「おい、衛兵は何をしている。こんな虫けら一つに手を掛けることも出来ないのか。それとも虫けらだから放っているのか　まあ、どちらでも構わないが。私がやっても良いのだが、あいにく時間が無いのでな。奴らに早めにつまみ出すよう伝えておけ」

「は・・・はあ」

侍女の曖昧な返事と固い顔は少し気になったが、シーナはそれ以上侍女の顔も少年の顔も見ず、再び前を向いて、慣れないドレスに内心奮闘しつつも颯爽と立ち去った。侍女たちは気遣わしげに少年の顔をちらちらと見た。中には小さく頭を下げる者もあった。それでも最後はシーナに遅れを取らないよう、慌てて立ち去った。一人

残らず、全員。

衛兵に“不法侵入”を伝える者は、遂に一人もいなかった。一人取り残された少年は、時が止まったかのようにぼかんと口を開けたまま、シーナの後姿を見送っていた。小さく、だが強くぎゅっと服の袖を掴んだ。震える顎を押さえようと、唇を噛んだ。そうしなければ泣きそうだった。

## 告げられる定め

やっと見慣れた扉を前にした時、既にシーナは軽く汗を掻いていた。ドレスは歩きにくい上、身体中に纏わり付いて息苦しいのだ。何度が深く呼吸し、自らを落ち着かせると、シーナは侍女に目配せした。

扉の脇に前以て待っていた侍女が軽く会釈を返し、トントン、と扉をノックした。控えめな声で、部屋の中の主へと声を掛ける。

「ロナルド様。シーナお嬢様をお連れ致しました」

しばらく沈黙が続いた。聞こえていなかったのだらうかと思った侍女が繰り返そうと息を吸った時、扉の向こう側、部屋の奥の奥からくぐもった低い声が聞こえた。

「入れ」

「失礼致します、お父様」

凜とした声音で堂々とシーナが答えるのと同時に、侍女が音も無く扉を開く。それが開ききるのを待って、シーナは同じ家でもなかなか訪れることのない父の部屋を一瞥した。

家具も調度品も置物も、配置は記憶とほぼ変わっていない。変わったことといえば、昔から父が大切にしている置時計の下に赤い布が新たに敷かれ、傷みゆく時を少しでも遅くしようとする意図が見えるだけであった。

部屋の奥、扉と向き合う形で置かれた大きな机の向こう側に、ずっと前からそこから動かなかったかのように、一つの影が座っていた。正確には、暗い影を称えたような初老の男だった。シーナは一

歩部屋へと入ると、背後で閉まる扉の気配を感じながらドレスの裾を少し持ち上げ、覚えたばかりの淑女の礼を披露した。元々自分が女性とはいえ、今まで男と同等に扱われてきたシーナにとってはこそばゆいことだった。

「ただいま戻りました、お父様。私の力不足故、ご要請から四日もお待たせしてしまったこと、深くお詫び申し上げます」

「・・・よい。顔を上げる、シーナ」

聞き慣れた厳格な声がシーナの頬を打つ。シーナはすつくと顔を上げ、久々に会う父の顔をまじまじと見つめた。

このような時、たとえ呼ばれたからと言って、けして自分から問いただすような真似があつてはならない。シーナはそういう風に教えられ、育ってきた。剣士たるもの、謙虚であるべし。

だからシーナは待っていた。シーナ同様、ロナルドもとつくりとシーナの顔を眺めた。やがて視線は、凜々しい顔から着慣れないドレスへと移る。それでもシーナは微動だにせず、待ち続けた。

ロナルドが、口を開いた。

「今回お前を呼んだのは、折り入って特別な話があったからだ。だから使者にも内容を伝えず、お前に戦火を抜け出してわざわざここまで来させた」

シーナは無言のまま、父の言葉に耳を傾けていた。

・・・思っていたよりも、重大な話なのかもしれない。

ロナルドは話を続けた。

「私は今まで、お前を剣士として育ててきた。男か、女かなどとい

う問いはあえて口にせず、お前を一介の剣士として鍛え、兄のレオと共に戦場へと送り出した。今、我が国エリアルに必要なのは、高貴な身分の男に嫁ぐありふれた淑女ではなく、戦場で王のため、国のために戦う剣士だと思ったからだ。思惑通りお前は強くなり、戦場では敵国にも名の知れる死の女神となった。それだけで私は、もう充分だと思っていた。・・・今まではな」

戦場で一人の強い戦力として役に立つなら、それで良いだろうと。だが、それでは結局一介の剣士止まりである。更に飛躍できる場が与えられるのだとしたら、それを逃す手は無い。

そして今、新たな道は開かれた。

ロナルドは改めて娘を見つめた。淑女とはかけ離れた筋肉を内に秘めるその身体は、内心ドレスをまとったらどんなことになるのだろうかと懸念していたのだが、思っていたより悪くない。いや、悪くないどころではない。普通に舞踏会に出入りする淑女達よりも、ずっと美しい。

大輪のバラのような華やかさではなく、野に咲く一輪の花のように凜としたものを、娘は持っている。

ここに来て初めて、ロナルドは心を固めた。

「シーナ。王子の嫁になれ。これはフィリップ王の勅命だ」

王に仕える第一の身分、宰相として。

剣士として育った娘の、たった一人の父として。

最高の榮譽を、与えよう。

不満か、不安か

重苦しい沈黙が漂った。シーナは一瞬、目の前が真っ白に染まる錯覚すら感じた。

この私が、ネロ王子の妻になる・・・

口を閉じたままの娘の心を読むかのように、ロナルドが畳み掛けた。

「不満か」

「いえ」

シーナは即答した。刹那、意識の奥底で何かがさっと通り抜けた気がしたが、シーナは何も無かったように振舞った。

不満など、ない。

ロナルドは、愛国エリアルルの活路を見抜いてきた鋭い瞳でシーナを見据えた。

「・・・では、不安か」

シーナは目を伏せた。

そう。この気持ちは、不満よりも不安の方が適切だ。

「・・・はい」

シーナは顔を上げ、ロナルドの突き刺すような眼孔と向かい合った。

「お父様がおっしゃる通り、私は女でありながら男のように育てられた身。剣士としての私は確かに戦場でお役に立てるかもしれませんが

んが、淑女として振舞うことは、とても一流とはいえませんが」

戦の最中に行われる剣士の余興のための舞踏会ですら、簡素な男装で出席して壁の花となるシーナが、目が痛くなるような華々しいドレスを着て男性とワルツに興じることなど出来るはずが無い。

しかしロナルドは同意せず、口の端を緩めた。

「そうか？ 私には、お前にそのドレスはとても似合っていると思うが。先ほどの礼も、付け焼刃にしては上出来だった……。長らく好まずとも女性を見てきたことが功を奏したんだろう……。それに」

ロナルドは先ほどまでの笑みを消し、真顔に戻った。  
部屋の空気が一変し、張り詰める。

「お前にネロ王子の妻として望むのは、我が国エリアルを導く王家の一員として、女性らしく振舞うことではない。むしろお前はそのままが良いのだ。淑女として覚えることはたしなみ程度。後は剣士としてのお前で構わない」  
「どういう、意味でしょうか」

シーナの目が細められた。ロナルドは内心再び口の端を上げた。難しいことを真剣に考える時、娘は決まってこのような目をする。それは自分を見ているようだった。

だがそんなことはおくびにも出さず、ロナルドは口を開いた。

「お前は、王子の真実を知っているか」

## 王子の真実

王子の真実。

シーナは心の中で繰り返し返した。ネロ王子の、真実。

今年で御歳14となるかの王子は、人前へ出ることを厭い、戦場での最低限のセレモニーにすら、ただ一度しか顔を出したことは無い。それも二年前の話だ。元々病弱らしく、戦に向けての姿勢が低いのもあるのだろう。とにかく、シーナが彼を見たことは、唯一あの戦前会だけだ。

シーナは顎を引いてロナウドを見据えた。

「・・・父上」

「正直に言え、シーナ。ここには私とお前しかいない」

シーナは一瞬目を伏せた。遠慮からではなく、父に心を見透かされたことに恥じ入ったからであった。肉親とはいえ、戦士が胸の内を見透かされるなどあつてはならない。まだまだ、鍛錬が足りない。

だがシーナは恥を押し込み、再び視線を上げた。父の、空を舞う鷹のような瞳がシーナを容赦無く射抜く。足元が揺らぐ錯覚を覚える。しかし正直に言えと言われた以上、偽って逃げるわけにはいかなかった。

一度だけ王子を垣間見たあの日。

剣を握り、戦士達に激励を与えよと王から命じられ、壇上に立った幼い彼を見、シーナは足の力が抜けたのを覚えている。

こんな、王子だったのか。

思わず口から零れそうになった言葉を、乾杯の合図で酒と共に喉に流し込んだ。

「ネロ王子は・・・私は一度しか拝見したことはございません。二年前のことです。王子が御歳12の時でした。まだ幼いとはいえ、12におなりになっていながら、あの剣の使いよう・・・。実践で用いているのを見るまでもありません。王子は・・・」

蚊の無くような高い声に、皆無言で耳を貸した。彼らにとってもシーナ同様、初めて見る姿だったのかもしれない。その目で、その瞳で、彼を記憶に留めようとしていたのかもしれない。

たどたどしく、いかにも自信がなさそうに、拳句の果てには言葉を間違え、宛がわれた台詞を忘れ、顔を真っ赤に染めながらも必死で語る王子、ネロ。最後の最後は、締めとも思えない締めで激励を終え、ちぐはぐに剣を振り上げた。あれほど気が抜ける掛け声も、他に無い。

エリアル、万歳。

我が国エリアルに栄光あれ。

「・・・剣を全くお使いになれない。おそらくあの様子からして、魔術も同様でしょう。あつて本から抜き取った知識が少々・・・。二年経った今、少しは成長しているかもしれませんが、それでも・・・一國を任すには、不足でしょう」

「その通りだ。一言付け加えるとしたら、二年前も今も、全く進展が見られないことだろう」

ロナウドは頷くでもなく、深く静かに息を吐いた。

「お前が、王子の妻としてすべきことは二つだ。一つ。剣士として、

ネロ王子に始終降りかかる災難をなぎ払う。二つ。剣士として、王子に剣や魔術などを出来るだけ習得させる。・・・まあ、もちろん妻となる以上、いずれ跡継ぎも生んでもらうがな。先の話だ。まずは剣士として身体を動かせ」

シーナは遠く、父の頭上に開かれた窓から空を見やった。耳を澄ませば、どこからか鳥のさえずりが聞こえてくる。現実を現実だと思わせ、かつ心を、この重苦しい空気に満ちた部屋から追い出してくれる空。無駄に騒ぐ胸を落ち着け、冷静になる瞳を貸す空。

「父上。少しだけ時間をいただけませんか。・・・承諾は致します。ただ、ほんの少しだけ、心の整理をしたいのです」

ロナウドの咎めるような瞳に、シーナは言葉を継ぎ足した。ロナウドはしばらく考え込む風を見せたが、やがて頷いた。

「良いだろう。しばし時間を与える」

「ありがとうございます。・・・では失礼致します」

シーナは一礼すると父に背を向け、歩き出した。扉を開こうとした丁度その時、ロナウドが思い出したように言葉を投げかけた。

「そういえば今、ネロ王子が我が屋敷にいらしている。お忍びなのでご自由に散策していただいているが、夜までにはお帰りになるそうだが・・・もう会ったか？」

シーナは振り返った。父を見、ちらりと窓から空を見る。一瞬、先ほどの少年の姿がよぎった。

「いえ、まだです。もしお会いできれば光栄ですが」

シーナはほんの少しだけ、笑みを浮かべた。どうして笑んだのか、  
自分でも分からなかった。

## 王子の真実（後書き）

\*すごく今更で恥ずかしいのですが、私、実は今受験を控えていてまして……。なので、元々遅かった更新が、しばらく絶えてしまうことかと思えます。ここまで読んできて下さった皆さん、ありがとうございます。どうか温かい目でこれからも見守っていただけたらと思います。申し訳ありません。お気に入りなどから外さないでいただけたら本当に嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6500j/>

---

Sword Queen

2010年11月5日07時38分発行